

# 中京大学 現代社会学部紀要

2013 第7巻 第1号

---

<論文>

災害ソーシャルワークの試行

——福島県相談支援専門職チームの  
活動からみえてきたこと——

……………野口典子(1)

奄美群島・喜界島と文化メディアエーター

——文化メディア学的視点から——

……………加藤晴明(29)  
……………寺岡伸悟

育児支援ネットワークと

母親の健康に関する日韓比較研究

……………牛島佳代(59)  
……………成元哲

福島原発事故後の健康不安・

リスク対処行動の社会的規定因

……………松谷満(89)  
……………牛島佳代  
……………成元哲

終わらない被災の時間

——原発事故後の福島県中通り9市町村の

親子の不安, リスク対処行動, 健康度——

……………成元哲(109)  
……………牛島佳代  
……………松谷満

## 福島原発事故後の健康不安・ リスク対処行動の社会的規定因

松 谷 満  
牛 島 佳 代  
成 元 哲

### 1. 問題

本稿では、福島原発事故後、(避難対象外)周辺地域に居住する母子の健康不安およびリスク対処行動について、質問紙調査データをもとに検討する。個々人の社会的・経済的状況が、自主的な避難や保養といったリスク対処行動とどのように関連しているのか、身体的・心理的健康についての不安感とどう関連しているのかを明らかにする。

原発事故後、放射能への不安から多くの周辺地域住民が自主的に避難をした。とくに子どもとその保護者の避難が目立って多かった。避難をしなかった／できなかった子ども・保護者の多くも、週末や休暇を利用して放射線量の少ない地域へと保養に出かけた。こうしたリスク対処行動の背景にある放射能不安は2年以上が経過した現在でも解消されていない。

こうした状況は広く知られているが、一方で個々の住民が置かれた社会的・経済的状況がどのように関連しているのか、ということについては調査が十分でない。(1) 子どもの年齢が低い、(2) 地域の線量が高い、という条件が不安やリスク対処行動と関連するという知見は得られている(筒井2011)。しかし、母子の家庭環境が具体的にどのように関連しているの

な情報を取捨選択し、無理のない形で避難ができていて、ということなのかもしれない。

以上のように、避難経験および期間に関連する要因を特定できた。しかし、モデルの説明力には注意が必要である。(擬似)決定係数はいずれも0.1程度と低い。社会的・経済的要因の影響は確認できたが、その関連はさほど強いものではない。

### 3-2 リスク対処行動(保養)

次に、保養について分析を行う。保養の頻度を被説明変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果を表4に示した。保養の頻度については、事故後の半年間、現在のそれぞれについて回答を得ている。リスク意識であるが、事故後の半年間の分析については事故直後の意識(保養を希望するかどうか)、現在の分析については、現在の意識をそれぞれ用いている。この保養に対する意識を被説明変数とした分析では、直後の時期では配偶者の学歴、現在については家計の状態が有意であった。配偶者が高学歴であるとより保養を希望するという関連、経済的な余裕がないとより保養を希望するという関連である。

保養については、事故後の半年間は約90%が出かけたことがある。現在でも、出かけることがあるのは75%程度と変わらず多い。ただ、その頻度は減っている。

事故後半年間の分析では、年長のきょうだいの有無の効果が明確である。年長のきょうだいがいる場合は、保養の頻度も高い。おそらく事故直後、学校などでも屋外の活動を控えるなかで、就学年齢の子どもたちを外で遊ばせたいという心理がはたらいたのであろう。

現在の保養で注目すべきは、配偶者の学歴の効果である。本人の学歴は関連しないが、配偶者が高学歴であると保養の頻度は高い。先の避難期間も含め、実際の行動では配偶者の教育の程度が影響しているのである。

表4 保養

	保養(事故後半年間)		保養(現在)	
	頻繁に	何度か	頻繁に	たまに
	B	B	B	B
年齢	-0.027	-0.033	0.015	-0.015
教育年数	0.108	0.094	-0.026	-0.027
教育年数(配偶者)	0.098	0.023	0.143 **	-0.012
家計の状態	0.173	0.065	-0.094	0.117
雇用形態(基準:正規)				
非正規	-0.289	-0.270	-0.119	-0.164
自営	-0.348	-0.285	-0.526	-0.404
無職	-0.369	-0.366	-0.230	-0.209
雇用形態(配偶者)(基準:正規)				
非正規	0.006	0.153	-0.522	-0.347
自営	-0.101	-0.274	0.628 *	-0.053
無職	-1.010	-0.837	-0.276	-0.522
実家県内	0.166	0.485 *	-0.207	-0.017
実家県内(配偶者)	-0.476	-0.455	-0.091	-0.076
年長きょうだい有	0.555 **	0.565 **	-0.462 *	-0.123
地域(基準:安達)				
福島	0.365	0.251	-0.053	-0.267
郡山・三春	-0.295	-0.175	-0.003	-0.049
伊達	0.061	0.141	0.054	-0.292
リスク意識	1.403 **	0.628 **	1.101 **	0.507 **
N	1750		1744	
$\chi^2$	215.758		198.877	
-2対数尤度	2951.677		2719.399	
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.137		0.132	

\*\* $p < 0.01$  \* $p < 0.05$

### 3-3 健康不安

健康に対する不安感は、8つの被説明変数についてそれぞれ社会的・経済的要因および避難・保養の経験を説明変数として、重回帰分析を行った(表5)。全体を通して特徴的な傾向を整理する。

か、といったことは明らかでない。

社会疫学を中心とする既存の研究蓄積から自明なように、社会的・経済的状況と健康とのあいだにはさまざまな関連がみられる（早坂 2001; 石田 2006; 川上・橋本・小林編 2006; 近藤 2005）。具体的には、社会的・経済的要因が物質的環境、ライフスタイル、医療・社会サービスの利用、人間関係、心理的ストレスといった因子の介在によって健康状態に影響を及ぼしうる（近藤 2005: 73-77）。

福島原発事故の場合、放射線による直接の身体的被害は顕在化していない。しかし、長期的にみて親子の身体的・心理的健康に及ぼす可能性（Bromet et al. 2011, Havenaar et al. 2003）を考えるならば、現時点での社会的・経済的要因との関連を明らかにし、広義の「被害構造」（飯島 1985）として問題化する必要があるのではないか。

本稿の目的をより具体的に示す。本稿では、[Q1] 社会的・経済的要因とリスク対処行動（自主的な避難および保養）とのあいだにいかなる関連がみられるのか、[Q2] 社会的・経済的要因と（現在および将来の）母親・子どもの放射線による身体的・心理的影響についての不安感とのあいだにいかなる関連がみられるのかを質問紙調査データの分析から明らかにする（図1）。その際、事故発生直後のリスク意識（リスク対処行動を希望したかどうか）も考慮し、不安感についてはリスク対処行動の有無も考慮する。

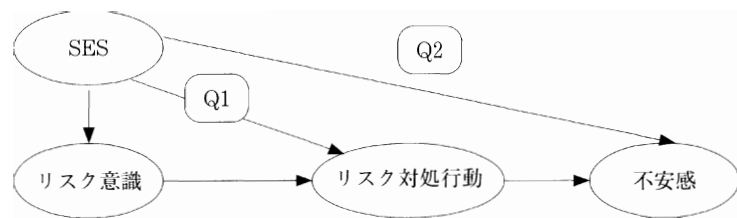


図1 分析モデル

## 2. データと変数

分析には2013年1~4月に実施した「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」のデータを用いる（成・牛島・松谷 2013）。今回、分析の対象とするのは、本調査が対象とした3歳児の母親である。調査回答者には父親、祖父母らも含まれているが、それらは取り扱わない。本稿は社会的・経済的要因の影響を明らかにすることが主目的であるが、その影響は回答者の性別や続柄によって大きく異なると考えられるためである。

もちろん、父親の社会的・経済的状況が影響しないということではまったくない。本稿の分析では、この効果も検証する。そのため、今回は有配偶者のみを対象とすることにした。

また、意識や行動にかかわる条件をそろえるため、原発事故発生時に対象の9市町村（福島市、郡山市、伊達市、二本松市、本宮市、国見町、桑折町、三春町、大玉村）に居住していた者に限定した。事故当時、対象地域外にあり、その後、当該地域に移動した者については、取り扱わない。くわえて、保養および不安感の分析では、調査時点で対象外地域（主に県外）に転居もしくは避難中の者も分析から除外する。このように対象を限定した結果、全サンプル2,611のうち、避難行動の分析で用いるのは2,310サンプル、保養および不安感の分析で用いるのは2,270サンプルとなる。

以下、本稿で用いる変数について説明する（表1）。社会的・経済的要因に関する変数として、年齢、学歴（本人・配偶者）、雇用形態（本人・配偶者）、家計の状態、実家の所在地（本人・配偶者）、年長のきょうだいの有無、そして地域を用いる。

原発事故後のリスク対処行動については、社会的・経済的な制約の問題が指摘されている。とくに、(a) 経済的な問題、(b) 仕事の問題、(c) 子どもの就学の問題が避難や保養を行ううえでの制約となっているとされ

る。経済的な余裕がないこと、仕事を長期に休めないこと、子どもが就学中の場合、長期欠席や転校を考えねばならないこと等がリスク対処行動を取りにくくさせているのではないかというのである。Q1の分析では、(a)～(c)の要因が実証的にも関連がみとめられるのかどうか焦点となる。

(a) 経済的な問題に対応するのは、家計の状態である。本調査では世帯年収もたずねているが、回答率、家族人数により同じ年収でも余裕の程度は異なること、配偶者と別居中の場合、年収を別に回答している可能性があることを考慮し、主観的な回答に依拠することとした。(b) 仕事の

表1 変数

変数名	情報
地域	福島市、旧伊達郡(伊達市、国見町、桑折町)、旧安達郡(二本松市、本宮市、大玉村)、郡山市・三春町の4区分。
年齢	
学歴(教育年数)	中学=9、高校・専門学校=12、短大・高専=14、大学・大学院=16。
雇用形態	正規、非正規、自営、無職の4区分(原発事故発生時点)。
家計の状態	5「ゆとりがある」～1「かなり苦しい」の5段階。
実家の所在地	福島県内か県外かという2値変数。
年長のきょうだい	年長のきょうだいの有無という2値変数。
リスク意識(避難)	「できることなら避難したいと思う」(4「あてはまる」～1「あてはまらない」の4段階)。
リスク意識(保養)	「放射線量の低いところに保養に出かけたいと思う」(4「あてはまる」～1「あてはまらない」の4段階)。
避難経験	避難経験の有無という2値変数。
避難期間	1. 1ヶ月未満 2. 1ヶ月～3ヶ月 3. 3ヶ月～6か月 4. 6か月～1年 5. 1年～1年6か月 6. 1年6か月以上
保養(事故後)	「頻繁に出かけた」「何度か出かけた」「出かけたことがない」の3区分。
保養(現在)	「頻繁に出かけている」「たまに出かけている」「出かけていない」の3区分。
健康不安	「あなたとお子さんの健康状態は、福島原発事故による放射能の影響をどの程度受けていると思いますか。」(本人・子どもの現在・将来の身体。心の健康=8変数)。 4「影響がある」～1「影響がない」の4段階。

問題に対応するのは、雇用形態である。分析では、正規、非正規、自営、無職というカテゴリを用いる。正規雇用の場合、リスク対処行動に一定の制約があるのではないかと推測される。(c) 子どもの就学の問題に対応するのは、年長のきょうだいの有無である。実際には、年長のきょうだいがいるとはいっても、それが就学中の子どもとは限らない。しかし、本調査ではきょうだい全員の年齢をたずねることはしていないため、代替的な指標として用いることとした。

リスク対処行動については、上記以外の関連も予測される。1つは地域である。対象の9市町村に限っても、累積放射線量の高さにはばらつきがある。今回の分析では4つのカテゴリに区分した。福島、伊達、安達、郡山という区分にした場合、福島および郡山は都市部を含む地域であり、伊達および安達は相対的には農村部といってよい。また、放射線量は伊達および福島が平均でみた場合は高い数値となっている。

もう1つ、実家の所在地、つまり本人および配偶者の親がどこに居住しているか、ということが関連している可能性がある。これにはいくつかの理由が考えられる。まず、親が同居もしくは近隣地域に居住していて、ふだんから緊密な交流がある場合、避難については制約となるだろう。親も含めての避難は合意を得る必要があり、かつ経済的な負担も大きく、避難先も自ずと限定されてしまう。かといって、親を残しての避難も心情的には抵抗がある。逆に、実家が被ばくを心配する必要があまりない、県外地域などであれば、避難は容易となる。実家での避難を選択するのであれば、避難先をさがす必要もないし、新たな生活への不安も比較的少なくて済む。

分析では、親の居住地(実家)が県内か県外か、という2値変数を用いる。調査では、同一住所、同一地域、県内他地域とより細かくたずねているが、いずれも線量の高い地域が含まれる可能性があるため、県内か県外かという単純な区分を用いることにした。

一方、Q2の分析においては、いかなる関連が予測されるだろうか。これについては、リスク認知および主観的な健康評価に関する既存の研究が

参考になる。長年リスク認知の研究を行ってきたスロビックは、性別、人種、階層等によってリスク認知に差がみられることについて次のような解釈を示している。リスク認知の差は、当人の社会的・経済的地位からみて、リスクにかかわることがから利益を受けることができるか、その決定に関与することができるか、それをコントロールすることができるかどうかの程度にかかっている。そこから疎外され脆弱な地位におかれた者ほどリスクを高く認識する (Slovic 2000: 396-402)。今回の事例に関しては、疎外された程度には大きな差がないとも考えられるが、学歴・収入という階層的要因が多少なりとも影響するとの予測は可能であろう。

主観的な健康評価と職業や収入などの階層的要因との関連については多くの知見があるが、そこでの説明の一部は健康不安にかかわる仮説にも援用できる。石田は高齢者を対象とした分析を行い、慢性疾患や通院などについては階層差を確認できなかったものの、「健康をより広範な生活の質として位置づけると、社会経済的な格差が歴然と存在する」(石田 2006: 154-155) との知見を得た。経済的資源を有効に用い、リスクを回避できるからというのがその解釈である。くわえて、医療情報についても、教育と所得が高いほどアクセスがよいとの知見を得、「医療情報は、社会・経済的地位と健康を結ぶひとつの媒介要因として考えることができる」(石田 2006: 157-159) としている。

この知見を今回の事例に適用するならば、スロビックの指摘に加え、経済的資源、情報へのアクセスおよび取捨選択の能力における優位という点でリスク回避に関して階層的要因が影響しているのではないかとの予測が可能である<sup>2</sup>。その「余裕」の差が、不安感にも影響している可能性があるのではないか。Q2に関しては、家計の状態、そして学歴(教育年数)という階層的要因の効果の有無が1つの焦点となる。

くわえて、今回の分析では配偶者(夫)の学歴、雇用形態、実家の所在地も取り上げている。リスク対処行動には下記の座談会での発言のように夫婦間のコミュニケーションが強く影響していると考えられるためである。

「避難や疎開の相談を聞いていると、避難しない、あるいは妻を避難させない男性の中には、ここで生まれて小・中・高校と福島で育ち、福島で就職したという、福島から離れたことのない男性が多いようです。～親と一緒に住んでいる時は親に、結婚してからは妻に生活上のことは頼りきりで自立できていない人も多い。～それでお母さんだけが焦っているケースが多く見られます。特に、マッチョな考え方を持つ男性の場合は、お母さんの心配を理解しようという姿勢が少なく、子どもを無用に被曝させてしまうこともあります。」(子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク 2012: 67)

この発言のように、配偶者の影響が広くみられるのかどうか、ということも今回の分析の焦点となる。

次に、リスク対処行動および健康不安にかかわる変数について説明する。まず、リスク対処行動以前のリスク意識である。本調査では、「できることなら避難したいと思う」、「放射線量の低いところに保養に出かけたいと思う」という項目で意識をたずねている。それぞれ原発事故直後、事故半年後、この1ヶ月間(現在)について質問を設けているが、今回の分析では、リスク対処行動の分析の際に、統制変数として用いる。

リスク対処行動については、避難経験の有無(避難経験者については)避難の期間、保養の頻度(原発事故から半年のあいだ、ここ半年間の2つの時期)についてたずねており、それを変数として用いる。

健康不安については、母親本人と子ども(対象の3歳児)について、現在の身体の健康、現在の心の健康、将来の身体の健康、将来の心の健康をたずねている。つまり、健康不安については8つの変数があることになる。

各変数の記述統計量は、表2のとおりである。

表2 記述統計量

変数名	情 報			
地域	福島 34.8 (798) 安達 13.0 (298)	伊達 9.5 (219) 郡山 42.7 (979)		
年齢	20代 16.4 (378) 30代後半 33.8 (781)	30代前半 36.2 (835) 40代 13.6 (315)		
学歴	中学 3.3 (77) 短大 20.1 (463)	高校 61.3 (1411) 大学 15.2 (351)		
学歴 (配偶者)	中学 6.4 (146) 短大 3.5 (81)	高校 62.8 (1444) 大学 27.3 (627)		
雇用形態	正規 29.0 (664) 自営 4.2 (95)	非正規 18.8 (431) 無職 48.0 (1099)		
雇用形態 (配偶者)	正規 80.9 (1850) 自営 12.6 (288)	非正規 4.9 (113) 無職 1.5 (35)		
家計の状態	ゆとりがある どちらかといえばゆとりがある ふつう どちらかといえば苦しい 苦しい	1.3 (30) 7.3 (167) 39.1 (892) 36.9 (842) 15.5 (353)		
実家の所在地	県内 83.8 (1650)	県外 16.2 (319)		
実家の所在地 (配偶者)	県内 87.8 (1813)	県外 12.2 (251)		
年長のきょうだい	あり 55.7 (1279)	なし 44.3 (1016)		
避難経験	あり 70.6 (1615)	なし 29.4 (672)		
避難期間	1ヶ月未満 57.7 (937) 3ヶ月～6か月 6.2 (101) 1年～1年6か月 4.0 (65)	1ヶ月～3ヶ月 18.6 (302) 6か月～1年 7.3 (118) 1年6か月以上 6.2 (101)		
保養 (事故後)	頻繁に出かけた 何度か出かけた 出かけたことがない	35.9 (805) 53.0 (1188) 11.1 (248)		
保養 (現在)	頻繁に出かけている たまに出かけている 出かけていない	9.9 (221) 65.3 (1461) 24.8 (554)		
リスク意識 (避難) 直後→半年後→現在	あてはまる 73.3 (1655) →55.0 (1241) →27.5 (620) どちらかといえばあてはまる 12.3 (278) →19.8 (446) → 17.6 (398) どちらかといえばあてはまらない 6.8 (153) →12.6 (285) →22.9 (516) あてはまらない 7.7 (173) →12.6 (285) →32.0 (723)			

リスク意識 (保養) 直後→半年後→現在	あてはまる 85.7 (1937) →76.5 (1727) →54.9 (1240) どちらかといえばあてはまる 6.5 (148) →13.2 (299) → 20.7 (467) どちらかといえばあてはまらない 2.7 (60) →5.2 (117) →10.9 (247) あてはまらない 5.1 (116) →5.1 (114) →13.5 (304)		
健康不安 (本人・現在・身体)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	11.8 (265) 23.2 (521) 38.5 (864) 26.4 (593)	
健康不安 (本人・現在・心)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	26.1 (587) 36.1 (812) 25.9 (583) 11.8 (266)	
健康不安 (本人・将来・身体)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	25.5 (566) 39.2 (869) 25.7 (571) 9.6 (212)	
健康不安 (本人・将来・心)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	28.4 (632) 38.4 (854) 22.9 (509) 10.3 (230)	
健康不安 (子ども・現在・身体)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	22.7 (508) 27.3 (611) 32.5 (728) 17.5 (391)	
健康不安 (子ども・現在・心)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	23.3 (523) 32.4 (727) 30.4 (683) 13.9 (311)	
健康不安 (子ども・将来・身体)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	48.0 (1063) 34.8 (770) 13.9 (308) 3.3 (72)	
健康不安 (子ども・将来・心)	影響がある 少し影響がある ほとんど影響がない 影響がない	39.5 (878) 37.7 (838) 16.1 (357) 6.7 (148)	

### 3. 分析

#### 3-1 リスク対処行動（避難）

Q1のうち、避難について分析を行う。避難の経験の有無を被説明変数としたロジスティック回帰分析、避難の期間の長さを被説明変数とした重回帰分析それぞれの結果を表3に示した。表中のリスク意識は原発事故直後に避難したいと考えていたかどうかの変数である。事故直後は約85%が避難を希望していた。なお、このリスク意識を被説明変数とし、社会的・経済的要因を説明変数としたロジスティック回帰分析は、家計の状態のみ有意であった。経済的に余裕がないほど、避難を希望するという関連である。

避難経験は約70%が「あり」と回答している。ただし、その期間は1ヶ月未満が過半数であり、1年以上になると10%程度である。おそらくは、事故直後の緊急避難が多かったのであろう。

避難経験の分析では、年齢、雇用形態、実家の所在地が有意であった。若年、無職（＝専業主婦）、本人および配偶者の実家が県外にあるといった条件が避難の確率を高めていた。避難については、経済的要因よりむしろ、これらの影響が強かったようである。実家については予測通りの結果となった。やはり、放射線被害の影響が低い地域に実家があるほうが避難を容易にしていた。年齢の影響については想定をしていなかったが、加齢にともなう身体能力の変化、居住年数の長さといったあたりが、避難を躊躇させる要因となっていたのかもしれない。

避難期間の分析では、教育年数（本人および配偶者）、雇用形態（本人および配偶者）、実家の所在地、年長きょうだいの有無、そして地域が有意であった。

すでに指摘されてきた要因が避難期間の長さに影響していることがわかる。ただ、(b) 仕事の問題、(c) 子どもの問題が避難の長期化を制約する

表3 避難経験・期間

	避難経験	避難期間
	B	$\beta$
年齢	-0.038 **	-0.035
教育年数	0.052	0.074 *
教育年数（配偶者）	-0.028	0.091 **
家計の状態	0.002	-0.027
雇用形態（基準：正規）		
非正規	0.244	0.012
自営	0.399	0.020
無職	0.520 **	0.156 **
雇用形態（配偶者）（基準：正規）		
非正規	-0.447	-0.037
自営	0.161	0.102 **
無職	0.202	0.020
実家県内	-0.916 **	-0.079 **
実家県内（配偶者）	-0.400 *	-0.010
年長きょうだい有	-0.111	-0.192 **
地域（基準：安達）		
福島	0.097	0.098 *
郡山・三春	0.172	-0.008
伊達	-0.001	0.099 **
リスク意識	0.421 **	
N	1765	1259
$\chi^2$	133.981	
-2 対数尤度	1995.452	
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.104	R <sup>2</sup> 0.106

\*\* $p < 0.01$  \* $p < 0.05$

ものである一方、(a) 経済的な問題は有意な関連がみいだせなかった。金銭面の問題以上に、母親が働いているかどうか、父親の仕事に融通がきくかどうか<sup>3</sup>、就学中のきょうだいがいるかどうか、実家がどこにあるか、といったことのほうが、避難の継続に影響を及ぼしているのである。

では、学歴の効果はどう解釈できるだろうか。本人および配偶者が高学歴である場合は、避難が長期化している。先に引用したような、避難に対する理解が教育の程度によって異なる、高学歴の避難者のほうがさまざま



な情報を取捨選択し、無理のない形で避難ができていて、ということなのかもしれない。

以上のように、避難経験および期間に関連する要因を特定できた。しかし、モデルの説明力には注意が必要である。(擬似)決定係数はいずれも0.1程度と低い。社会的・経済的要因の影響は確認できたが、その関連はさほど強いものではない。

### 3-2 リスク対処行動(保養)

次に、保養について分析を行う。保養の頻度を被説明変数とした多項ロジスティック回帰分析の結果を表4に示した。保養の頻度については、事故後の半年間、現在のそれぞれについて回答を得ている。リスク意識であるが、事故後の半年間の分析については事故直後の意識(保養を希望するかどうか)、現在の分析については、現在の意識をそれぞれ用いている。この保養に対する意識を被説明変数とした分析では、直後の時期では配偶者の学歴、現在については家計の状態が有意であった。配偶者が高学歴であるとより保養を希望するという関連、経済的な余裕がないとより保養を希望するという関連である。

保養については、事故後の半年間は約90%が出かけたことがある。現在でも、出かけることがあるのは75%程度と変わらず多い。ただ、その頻度は減っている。

事故後半年間の分析では、年長のきょうだいの有無の効果が明確である。年長のきょうだいがいる場合は、保養の頻度も高い。おそらく事故直後、学校などでも屋外の活動を控えるなかで、就学年齢の子どもたちを外で遊ばせたいという心理がはたらいたのであろう。

現在の保養で注目すべきは、配偶者の学歴の効果である。本人の学歴は関連しないが、配偶者が高学歴であると保養の頻度は高い。先の避難期間も含め、実際の行動では配偶者の教育の程度が影響しているのである。

表4 保養

	保養(事故後半年間)		保養(現在)	
	頻繁に	何度か	頻繁に	たまに
	B	B	B	B
年齢	-0.027	-0.033	0.015	-0.015
教育年数	0.108	0.094	-0.026	-0.027
教育年数(配偶者)	0.098	0.023	0.143 **	-0.012
家計の状態	0.173	0.065	-0.094	0.117
雇用形態(基準:正規)				
非正規	-0.289	-0.270	-0.119	-0.164
自営	-0.348	-0.285	-0.526	-0.404
無職	-0.369	-0.366	-0.230	-0.209
雇用形態(配偶者)(基準:正規)				
非正規	0.006	0.153	-0.522	-0.347
自営	-0.101	-0.274	0.628 *	-0.053
無職	-1.010	-0.837	-0.276	-0.522
実家県内	0.166	0.485 *	-0.207	-0.017
実家県内(配偶者)	-0.476	-0.455	-0.091	-0.076
年長きょうだい有	0.555 **	0.565 **	-0.462 *	-0.123
地域(基準:安達)				
福島	0.365	0.251	-0.053	-0.267
郡山・三春	-0.295	-0.175	-0.003	-0.049
伊達	0.061	0.141	0.054	-0.292
リスク意識	1.403 **	0.628 **	1.101 **	0.507 **
N	1750		1744	
$\chi^2$	215.758		198.877	
-2対数尤度	2951.677		2719.399	
Nagelkerke R <sup>2</sup>	0.137		0.132	

\*\*p<0.01 \*p<0.05

### 3-3 健康不安

健康に対する不安感は、8つの被説明変数についてそれぞれ社会的・経済的要因および避難・保養の経験を説明変数として、重回帰分析を行った(表5)。全体を通して特徴的な傾向を整理する。

表5 健康不安

本人	現在・身体	現在・心	将来・身体	将来・心
年齢	0.002	0.004	-0.059 *	-0.012
教育年数	-0.049	-0.034	-0.103 **	-0.060 *
教育年数(配偶者)	-0.004	0.022	-0.037	-0.001
家計の状態	-0.163 **	-0.181 **	-0.176 **	-0.195 **
非正規	-0.019	-0.032	0.002	0.002
自営	0.030	0.004	-0.014	-0.015
無職	0.015	0.032	-0.040	-0.011
非正規(配偶者)	0.000	-0.010	-0.017	-0.031
自営(配偶者)	0.021	0.044	-0.007	0.016
無職(配偶者)	0.014	0.008	-0.008	-0.016
実家県内	0.044	0.042	0.052 *	0.030
実家県内(配偶者)	0.043	0.051 *	0.032	0.049 *
年長きょうだい有	-0.006	-0.049 *	-0.005	-0.014
福島	0.006	0.038	0.015	0.018
郡山・三春	0.036	-0.026	0.032	-0.002
伊達	0.011	0.005	-0.001	0.012
避難経験	0.039	0.106 **	0.082 **	0.100 **
保養頻度(現在)	0.120 **	0.171 **	0.106 **	0.160 **
N	1714	1717	1701	1705
R <sup>2</sup>	0.047	0.087	0.084	0.084
子ども	現在・身体	現在・心	将来・心	将来・身体
年齢	0.003	-0.016	0.005	0.006
教育年数	-0.036	-0.067 *	-0.137 **	-0.117 **
教育年数(配偶者)	-0.019	0.006	-0.044	-0.009
家計の状態	-0.162 **	-0.206 **	-0.190 **	-0.219 **
非正規	-0.034	-0.008	-0.039	-0.040
自営	0.024	-0.012	-0.015	-0.009
無職	0.007	0.008	-0.065 *	-0.056 *
非正規(配偶者)	0.039	0.020	0.012	-0.017
自営(配偶者)	-0.010	0.023	-0.013	-0.017
無職(配偶者)	0.014	0.051 *	0.030	0.062 **
実家県内	0.068 **	0.050 *	0.060 *	0.066 **
実家県内(配偶者)	0.027	0.011	0.032	0.030
年長きょうだい有	-0.016	-0.045	-0.020	-0.040
福島	0.003	0.014	-0.026	-0.012
郡山・三春	0.048	0.020	0.007	0.009
伊達	-0.009	0.007	-0.047	-0.028
避難経験	0.016	0.079 **	0.051 *	0.054 *
保養頻度(現在)	0.121 **	0.153 **	0.094 **	0.131 **
N	1709	1715	1695	1700
R <sup>2</sup>	0.052	0.088	0.092	0.080

\*\*p&lt;0.01 \*p&lt;0.05

第1に、すべてにおいて有意であったのは家計の状態である。経済的な余裕がないほど健康に対する不安が強いという関連である。リスク対処行動では関連がみられなかったが、主観においては経済的状况と健康不安とは直接的に結びついている。

第2に、実家が県外であったという僥倖の効果も明確である。実家が県外の場合、子どもの健康に対する不安は軽減される。県外に避難可能な場所が確保されているということが安心につながっているのだろう。効果は微弱であるが、母親の心の健康については本人の実家ではなく、配偶者の実家が影響している。実家が県内であると不安は強い。配偶者の親との関係の心理的影響を示唆するものともみることができる。

第3に、とくに将来の健康不安については、本人の学歴が有意な関連を示す。先行研究から解釈するならば、本人の情報へのアクセスの程度やその処理能力への自信の程度が、将来にわたってリスクを回避できるかという見通しに影響しているものと考えられる。ただし、認知と教育程度との関連については、他の解釈の可能性もあわせて検討する必要はあるだろう。

第4に、リスク対処行動との関連である。分析にあたり、リスク対処行動が不安感を低下させるという推測もなかったわけではない。しかし、結果はリスク対処行動と不安感とは正の関連でしかなかった。したがって、リスクを高く見積もることがリスク対処行動を促し、かつ不安感を高めると考えたほうがよさそうである。対処行動を望んでいるにもかかわらず、それが社会的・経済的な制約によって果たされないことからくる意識—行動のズレが不安を増幅させるのではないか、との推測もあったが、追加で行った分析では、そのような関連をみいだすことはできなかった。

#### 4. 結論

本稿では、福島(避難対象外)周辺地域に居住する3歳児の母親に関して、そのリスク対処行動と健康不安について検討した。[Q1] 社会的・経

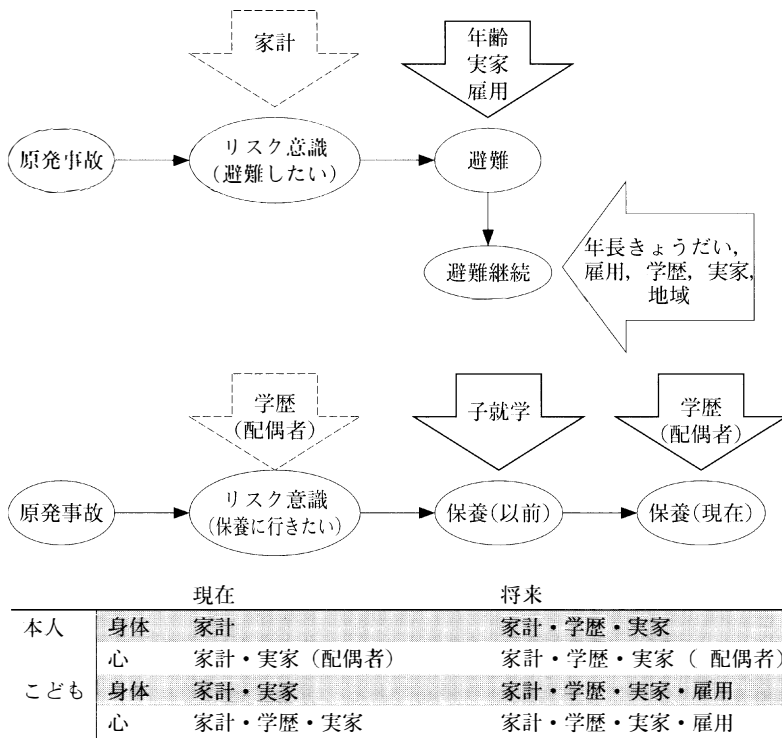


図2 分析結果のまとめ

経済的要因とリスク対処行動とのあいだにいかなる関連がみられるのか、[Q2] 社会的・経済的要因と不安感とのあいだにいかなる関連がみられるのかについて分析を行った。その結果を図2に整理した。

Q1については、指摘されていた(a) 経済、(b) 仕事、(c) 子ども(就学等)の影響の有無に注目した。分析の結果、経済的要因の影響は明確でなく、仕事と子ども年齢という要因が重要であることがわかった。くわえて、親の居住地、配偶者の学歴といった母子以外の家族の影響が明確にみとめられた。

リスク対処行動における配偶者の影響は注目に値する。結果から示唆さ

れるのは、第1に、母子のリスク対処行動には、父親の意向がより反映されているのではないかと、第2に、その意向には、教育の程度が影響しており、それは対処行動への理解や寛容さといった点から解釈が可能ではないかということである<sup>3)</sup>。

Q2については、疎外感、資源、情報のコントロールといった側面から、階層的要因の効果に注目した。結果、家計の状態と学歴はともに健康不安と明確に関連することがわかった。階層的な脆弱性をもつ人びとにとって、将来にわたって子どもを守ることができるのか、地域の現状をみるにつけ、その不安を払拭しがたいのはある意味、当然のことであろう。

全体にいえることだが、本人および配偶者の実家がどこにあるか、親がどこに住んでいるのか、ということが今回の被災に関しては非常に重要な意味をもつことが示された。放射線被害に直面することとなった親子は、家族などの頼れる存在が身近にはなく、むしろ遠く離れた地域に住んでいることがかえって安心をもたらすという逆説的な状況に置かれているのである。

本調査の分析は緒に就いたばかりだが、原発事故被災者が置かれた複雑な状況の一端は示された。被災者の実態はいかなるもので、何が必要とされているのか、どのような支援が可能であるのか、このような調査分析を積み重ねていく必要がある。本稿の知見から明らかのように、経済的補償は重要ではあるが、支援のすべてではない。家族、職場、地域におけるさまざまな関係性が母子の健康に影響を及ぼしうる。被災後の関係性の構築をいかにしうるのか、そこにむけた知見の導出が今まさに必要とされている。

【付記】本研究は科学研究費補助金 (No.24330165, No.23890239) の成果である。調査にご協力いただいたすべての方々に深く御礼申し上げたい。

## 注

- 1 たとえば、『NHK スペシャル 3.11 あの日から2年 福島がいまを知っていますか』(2013年3月9日放送)  
<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2013/0309/>。
- 2 この点、飯島もまた次のように指摘しているところである。「自力回復は、経済力の差によってのみ生じているのではなく、そもそもはまず、適切な医療やリハビリについての的確な情報源を得るだけの学識や知人・友人を有しているか、というレベルから格差は始まる。次に、得た情報を実現するための制度を享有していること、あるいは経済的余裕を有していること、その間、現在の収入や職業上の身分を失わずに医療処遇を受けられるだけの社会的地位が必要になる。ブルーカラー層や農漁民には得るべくもない機会なのである」(飯島1985)。
- 3 ここでは、配偶者が自営業であることの効果を「融通がきく」というように解釈したが、より多様な解釈が可能であることはいうまでもない。
- 4 もちろん、経済的状况を把握するための指標を被調査者の主観に頼っていること、事故前と現在との経済的状况の変化を調査に組み込んでいなかったことなどから、本来はみいだせるはずの関連を捉えそこねた可能性はある。この点は今後の課題として残されている。
- 5 ただ、データを確認した範囲では、リスク対処行動および学歴と夫婦間のコミュニケーションとのあいだには何ら関連をみいだすことができなかった。それはつまり、仮に配偶者の意向が優先しがちであっても、母親は必ずしも強い不満を抱いているわけではないということである。

## 文献

- Bromet, E.J., J.M. Havenaar and L.T. Guey, 2011, "A 25 Year Retrospective Review of the Psychological Consequences of the Chernobyl Accident," *Clinical Oncology*, 23 (4): 297-305.
- Havenaar, J.M. et al., 2003, "Perception of Risk and Subjective Health among Victims of the Chernobyl Disaster," *Social Science & Medicine*, 56: 569-572.
- 早坂裕子, 2001, 「健康・病気の社会的格差」山崎喜比古編『健康と医療の社会学』東京大学出版会, 49-71.
- 堀川三郎, 2012, 「環境社会学にとって『被害』とは何か——ポスト3.11の環境社会学を考えるための一素材として」『環境社会学研究』18: 5-26.
- 飯島伸子, 1985, 「被害の社会的構造」宇井純編『技術と産業公害』国際連合大学, 147-171.
- 石田浩, 2006, 「健康と格差——少子高齢化の背後にあるもの」白波瀬佐和子編

- 『変化する社会の不平等——少子高齢化にひそむ格差』東京大学出版会, 137-163.
- 川上憲人・橋本英樹・小林康毅編, 2006, 『社会格差と健康——社会疫学からのアプローチ』東京大学出版会.
- 子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク, 2012, 「座談会 子どもたちの未来を守るために」『世界』827: 63-74.
- 近藤克則, 2005, 『健康格差社会』医学書院.
- Slovic, P., 2000, *The Perception of Risk*, Earthscan.
- 成元哲・牛島佳代・松谷満, 2013, 「終わらない被災の時間: 福島原発事故後の遷延化した不安, ストレス, リスク対処行動の社会的分析」『中京大学現代社会学部紀要』7 (1).
- 筒井雄二, 2011, 「多重災害ストレスが児童期および幼児期の精神的健康に及ぼす影響」『福島大学研究年報 別冊 福島大学東日本大震災総合支援プロジェクト「緊急の調査研究課題」』, 21-26.

執筆 者 紹 介 (執筆順)

野 口 典 子 中京大学現代社会学部教授  
加 藤 晴 明 中京大学現代社会学部教授  
寺 岡 伸 悟 奈良女子大学文学部准教授  
牛 島 佳 代 福岡大学医学部講師  
成 元 哲 中京大学現代社会学部教授  
松 谷 満 中京大学現代社会学部准教授

◆編 集 後 記

今号から新しい紀要編集体制となったが、予定より遅れた刊行となってしまった点、深くお詫び申し上げたい(成)。

内容は、福島原発事故関連論文が4本と奄美のメディア文化に関する論文が1本である。それぞれ、読み応えのある、次につながる試みや思考の宝庫のような論文である。一度、手にとってもらいたい。(大友、成)

現 代 社 会 学 部 紀 要 編 集 委 員

大 友 昌 子・成 元 哲

中京大学現代社会学部紀要 第7巻 第1号  
(旧) 社会学部紀要通巻第52号

発行日 2013年12月20日(2013年度)

発 行 所 中京大学現代社会学部  
〒470-0393 豊田市貝津町床立101

発 行 者 野 口 典 子

編 集 者 現代社会学部紀要編集委員会

印 刷 所 株式会社 一 誠 社  
名古屋市昭和区下構町2-22